

# 中野逍遙小論

——逍遙における邵雍——

森 博 行

## 序 文

中野逍遙（重太郎）は、明治の漢詩人である。

彼は、慶応三年（一八六七）二月十一日、宇和島城下賀古町にうまれ、明治廿七年（一八九四）十一月十六日、午前九時、東京の山龍堂病院において死去した。二十七歳の若さであった。その間、明治廿二年（一八九九）、第一高等中学校本科一部（文科）第二年（三之組）に進級したとき、同級生に夏目金之助（漱石）や正岡常規（子規）がいた。しかも逍遙は漱石（一八六七—一九一六）・子規（一八六七—一九〇二）と同年の生まれである。逍遙の作品は、彼が亡くなった翌年明治廿八年（一八九五）十一月十六日、『逍遙遺稿』（正外二編）と題して五百部発行された。

以上の記述は、川崎宏著『中野逍遙の詩とその生涯——夭折の浪漫

詩人——（愛媛県 平成七年三月）付載の「中野逍遙 略年譜」にもとづいて略記したものである。なお、子規は『逍遙遺稿』に「逍遙遺稿の後に題す」〔逍遙遺稿〕付「雜録」という一文を寄せ、漱石は『逍遙遺稿』の発刊にあたって子規らとともに一円を拠出してゐる。また小室善弘氏が指摘されるとおり、逍遙は「上根岸に住む子規を訪れ、胸中の苦悩を語り文壇への進出について助力を願っていたことは、子規宛の書簡（明26・5・8）にも見えている<sup>(2)</sup>」。

ところで、筆者の専門は、中国古典文学であるが、たまたま逍遙の漢詩を読む機会があつて、「千歳高標す 杜子美、生平の雅致 邵堯夫」という一聯があることを知り、好奇心をそそられた。だが、逍遙に関する情報は、それまで皆無であつた。そこで情報を集めることにした。ところが情報が集まりはじめると、なぜだか興味がいよいよ強くなり、その結果、さらに情報量が増え、興味もいっそう強くなる。そうすると、ただひたすら黙々と収集につとめるだ

けでは、気がすまなくなる。これは自然の趨勢だ。しかし、私見を公にするにあたっては、十分な吟味をしたうえで、正当な理由づけが必要である。まして専門外のことである。かくて推敲を重ねたうえで、非専門の逍遙から専門の邵雍を照射することによって、邵雍の文学的特性があらたに闡明され、邵雍研究がいつそう豊穡なものになるのではないか、それと同時に中野逍遙の研究にも裨益するところがあるのではないか、という理由づけを得た。仕上がったものが、一夜漬けの水つぼさを免れていれば、幸いである。なお、逍遙の作品は、笹川臨風 金築松桂訳『逍遙遺稿』として岩波文庫に収められている。発行は1929年9月。本稿に引用する逍遙の作品は、1994年10月第5刷の岩波文庫本による。

### 一、逍遙の情詩

生年を同じくするのみならず、同級生でもあった漱石や子規と較べれば、逍遙の知名度ははるかに低いけれども、逍遙と親しく交際し、『逍遙遺稿』に「懷逍遙子」(233頁)と題する一文を寄せた田岡嶺雲(一八七〇―一九二二)は、「多感の詩人故中野逍遙(下)」<sup>3)</sup>において、逍遙の漢詩「思君」「道情」「長相思」を取りあげ、

嗚呼此可憐姝、此可憐子、何人ぞ、何者ぞ。予嘗て之を以て逍遙にた、く、逍遙笑て答へず而かも其哭花詩による、彼か相思の人、此の可憐の姝、彼を捐して逝き、彼に先たつて去れるな

り。埋香瘞玉、多感の彼か憾知るへきのみ。

と、激した調子で記している。右の文中の「哭花詩」は、逍遙の「哭花十律」(四、295頁)をさす。この詩の序である「哭花録」によれば、明治甲午(二十七年 一八九四)二月の作。「その一」は、次のような作品である。

去者蕩々不可留 去る者は蕩々として留む可からず

由来歲月水東流 由来 歲月 水の東流するがごとし

誤取絶艶美人淚 誤ちて収む 絶艶 美人の涙

枉作俊才奇士愁 枉げて作す 俊才 奇士の愁

木葉応知天地慘 木葉 応に知るべし 天地の惨

雁声始駭海湖秋 雁声 始めて駭く 海湖の秋

幽魂漠々迷何処 幽魂 漠々として何れの処にか迷う

白雨黒風滿綺樓 白雨 黒風 綺樓に満つ

第7句の「幽魂」は、李白に「曠野 白骨多く、幽魂 共に銷鏤

す」(擬古十二首・其七)とつたわれているように、死者の靈魂。

逍遙の詩の場合は、「花」つまり女性の死亡した靈魂である。最後の一句は、蘇軾の著名な七言絶句「六月二十七日、望湖樓に酔うて書す五首・その一」の前半二句

黒雲翻墨未遮山 黒雲 墨を翻して 未だ山を遮らず

白雨跳珠乱入船 白雨 珠を跳らせ 乱れて船に入る

と、許渾の七言律詩「咸陽城の東樓」(三體詩)に収録の一聯

溪雲初起日沈閣 溪雲 初めて起こって 日 閣に沈み

山雨欲來風滿樓 山雨 來らんと欲して 風 樓に満つ

との兩詩句から脱化したものではないかと思われる。「綺樓」は、女性の生前の住居。結びの一聯は、この世に未練を残して死んでいった女性の恨魄が地上に徘徊する、陰々滅々とした不気味な光景である。この詩によるかぎり、女性は死んだものと思われ、嶺雲も、「此の可憐の妹、彼を捐して逝き」と、そのように理解していた。またこの詩は、第7句や第3・4句からかんがえて、相思相愛の「絶艶の美人」と「俊才の奇士」として表現されている。しかし、女性の死、相思相愛、どちらも詩的仮構であつて、後述するとおり、事實はそうでなかつた。現在よりはるかに精神的社会的に大人であつたであろうが、それでも二十七歳といえはまだ経験のすくない若者。右の詩は、未熟な男性の恋愛にたいする甘美な夢想であり、いかにもいじらしい。

右に引用した詩がはからずも暗示しているように、『逍遙遺稿』におさめられた逍遙の漢詩の特徴が、かれ自身の恋情をうたつたことであることは、次に引用する二つの文章から明らかである（以下、すべて漢字は新字体に、仮名づかいは現代仮名づかひにあらためた）。

逍遙の詩は実に才と涙とより成れり。而して少しくその内容に立ち入れば、厭世と恋愛との二に出でず。彼の厭世観は未だ李白以下の樊籠を脱する能わざれども、恋愛詩に於ては、彼は能く成功せり。漢詩人に於ては、絶えて其前蹤を見ず、恋愛詩人としては、彼実に漢詩壇上に巖立するに足る。ダンテ逸たり、

ゲテ趁うべからず。バイロン、ケルネル、さては血あり涙ある在五中將の才気情熱、今日の詩壇、独り逍遙に於て之を見るのみ。

これは、逍遙より二歳若い大町桂月（一八六九—一九二五）が逍遙の死んだ翌年、明治二十八年（一八九五）の十二月、逍遙をいたんで記した「逍遙遺稿を讀む」の一節である。また昭和三十四年（一九五九）九月に発表された笹淵友一著「明治の漢詩人 中野逍遙<sup>(5)</sup>」の一節に次のように記されている。

逍遙を語つて彼の恋愛に触れなければむしろ語らないに等しいといつてよい位『逍遙遺稿』は恋愛詩で満たされている。

詩歌と恋情、恋は『万葉集』以来現在まで、ずっとたい続けられてきた文学的テーマである。ところが従来、日本の漢詩人で個人的恋情をうたつた情詩を特徴とする詩人はいになかつた。和歌とちがつて、儒家的伝統のつよい影響下にあつた日本の漢詩は、恋の世界と無縁であつた。漱石の場合、彼にもひそかに慕う女性がいたといわれるが、彼の漢詩にこの種の情詩は一首もみられない。また子規の「子規<sup>(6)</sup>」と題する七律の「青樓 別れを悲しんで 人に影無く、翠帳 婦を促して 月に声有り」云々は、小谷喜一郎氏に「中野逍遙を彷彿させるセンチメンタルな艶体詩である」と指摘されているが、この漢詩には一種の遊びがあるように見受けられる。子規の自注によれば、前句は、吉原の遊女・高尾太夫の句「君はいま駒形あたりほととぎす」、後句は、後徳大寺左大臣の歌「ほととぎす鳴き

つる方をながむればただ有明の月ぞ残れる」をそれぞれふまえ、俗と聖が混在しているからである。少なくともこの漢詩をもって子規の代表作とすることはできないだろう。逍遙の特異性、おもうべし。「心のみかは手も足も 吾身はすべて火炎なり 思い乱れて嗚呼恋は 千筋の髪に波に流るる」(おくめ)<sup>(8)</sup>、恋の情熱に身も心も燃えあがる炎とうたった、逍遙より五歳若い浪漫主義詩人・島崎藤村(一八七二―一九四三)が逍遙の漢詩に衝撃を受けたのは、当然のことであった。彼の「哀歌」(『若菜集』所収)の序文「中野逍遙をいたむ」の後に続いて引用されているところの逍遙「思君九首」(『逍遙遺稿』では十首)と題する詩の「その一」(97、100頁)を引用しておこう。

思君我心傷 君を思いて 我が心は傷み

思君我容瘁 君を思いて 我が容は瘁る

中夜坐松蔭 中夜 松蔭に坐せば

露華多似涙 露華 多に涙に似たり

「容」は容貌。「瘁」は悴におなじ、やつれる。「中夜」は夜中。

「松蔭」は松のこかげ。「露華」は露。「多」は、まさに、ただ、と訓読される強調の副詞。「露華」の句は、これまで「多きこと涙に似たり」、あるいは「涙より多し」と訓読されている。あえて異を立ててみた。いかがであろうか。なお、小夜曲を彷彿させるこの甘美な情詩は、「君」は異性をさすとともに、裏に主君(あるいは友人)の意味をふくみ、男の女にたいする思慕の情をかりて、主君

(友人)に対する真心をうたった、という解釈も不可能ではない。こういう解釈が古来、中国に存在するからである。しかし、悲しい結末であったけれども、南条貞子という実在の女性に対する逍遙の一途な慕情をうたった作品であるところに、「思君十首」の文学的魅力と歴史的意義がある。おそらく異性に恋をし、そして恋にやぶれるのは、青年男女の多くが経験する通過儀礼のようなものであるが、漢詩という古い容器の中に、青春の愛の情熱と憂愁という新しい液体を盛り込んだという点において、逍遙漢詩の強烈さと新鮮さがある。日夏耿之介(一八九〇―一九七二)の硬質な美文を引用すれば、「青春の夢見る如き倘恍と抑え難き狂熱と真摯な觀照とを伝説的詩形の窮屈な約束の中に押し包んで而も裂け出でんばかりの激情をよく表現している」<sup>(9)</sup>。

最後に蛇足ながら、逍遙には「春夢女史」・「春夢子」と呼んでいゝる、もう一人の恋愛感情をいだいた和歌山の女性、本名・坪井すむがいた。原田憲雄氏の「中野逍遙『遺稿』中の『春夢子』など――二宮俊博氏の論考にうながされ若林芳樹氏の示教により――」<sup>(10)</sup>をはじめとする一連の論稿に詳しい。また「春夢女史」は「誰が罪」と題する小説を書いており、やはり原田氏によって翻刻されている。<sup>(11)</sup>この小説でも逍遙をモデルとしている岡野一郎は愛を告白したが、「そんな事はいやです」、「ほんとに嫌です」(第九回)『方向 第一三二号』と、作者の投影である藤井俊文字に拒絶されている。興味ぶかいことに、逍遙は「明治廿六年八月帰郷中」(48、100頁)と題する

詩の一聯に

春夢繫思南紀浦 春夢 思いを繋ぐ 南紀の浦  
秋琴馳涙東武州 秋琴 涙を馳す 東武の州

とうたっている。「東武」は貞子のいる東京である。まことに逍遙は、正岡子規が評したとおり、「多情多恨の人」<sup>(12)</sup>であった。

二の(一)、「千歳高標す 杜子美、

生平の雅致 邵堯夫」

中野逍遙の漢詩の特徴が、逍遙個人の恋をうたった詩にあるとしても、恋の詩ばかりが逍遙の漢詩というわけではない。『逍遙遺稿』の冒頭に「偶成」と題する漢詩が二首、連作として収められている。この詩は、『中野逍遙の詩とその生涯―夭折の浪漫詩人―』(77頁)によれば、「詩稿 一 『芸窓余感』(在予備門作)」に収録されており、明治十七年(一八八四 十七歳)から明治十九年(一八八六 十九歳)までの青春時代に作られた作品である。「偶成」詩「その二」は、次のとおりである(16、46頁)。

一片清光夜色敷 一片の清光 夜色敷く  
茫茫風露滿皇都 茫茫たる風露 皇都に満つ  
問牛宰相今邈矣 牛を問う宰相 今邈たり  
橫槩英雄安在平 槩を横たう英雄 安くに在るか  
千歳高標杜子美 千歳高標す 杜子美

生平雅致邵堯夫 生平の雅致 邵堯夫

此間真味誰知得 此の間の真味 誰れか知り得ん

八百八街大月孤 八百八街 大月孤なり

詩題の「偶成」は伝統的な題名。偶然に成ったと題して、個人的な感慨や抱負をうたうことが多い。逍遙は二十七年の生涯に、「偶成」と題する詩を十首ばかり作っている。右の詩は、「皇都」の「八百八街」つまり東京の夜空をその「一片の清光」が照らす「大月」と、「大月」に触発されてうまれた感慨とをうたったものである。その感慨とは、いったいどのようなものであったのだろうか。次の手順で考えてみることにする。第一に、第3・4句、および第5・6句の分析、第二に、第8句の「大月」(Great moon)をめぐる問題、第三に、第7句の「此の間の真味」の真相。

第3句の「問牛宰相」は漢の宰相・丙吉。彼は陽春のある日、街中を巡察していて、温和な季節にもかかわらず、ハアハアあえいでいる牛に出会った。牛の異常をみて、陰陽の調和の乱れを察知し、重大な障害が起こるのではないかと、丙吉はうれえた。『漢書』巻七十四「丙吉伝」(蒙求)にも「丙吉牛喘」としてのせる。また暑さをおそれる呉牛は、日と勘違いして、月を見て喘ぐという話が、『世説新語』(上之上「言語」)にある。第4句の「横槩英雄」は三國の曹操。蘇軾の「前赤壁の賦」(古文真宝 後集 卷之二)に曹操を詠じて、「槩を横たえて詩を賦す。固に一世の雄なり。而るに今安くに在りや」と記され、賦の中に曹操の「短歌行」の「月明らか

にして星稀れに、鳥鵲は南に飛ぶ」が引用されている。

注目されるのは、第5・6句の「千歳高標す 杜子美、生平の雅致 邵堯夫」である。「千歳に高標す」る（千年の文学史にぬきんで高くとそびえる）「子美」は杜甫の字、「生平の雅致」（つねひろの風流な）「堯夫」は邵雍の字。丙吉と曹操の場合、卓越した政治家という点で両者は共通する。しかし、杜甫と邵雍との組み合わせは、奇妙な印象をうける。なぜなら逍遙が「詩は則ち杜甫の沈痛」（上毛漫筆 102、206頁）と評しているように、逍遙にとつて杜甫は中國における最高の詩人であつたが、邵雍はいわゆる新儒学の創始者「北宋の五子」（周敦頤・張載・程顥・程頤、そして邵雍）の一人で、先天易と呼ばれる易学の専門家、世にいう道学者であり、そのうえ隠者でもあつて、杜甫と共有する積極的な要素がないように思われるからである。ところがじつは、邵雍はかれの詩集『伊川擊壤集』に千五百首あまりの多量の詩を伝えていて、著名な哲学詩人でもある。さらに興味深いことに、杜甫と邵雍との組み合わせは、逍遙以前に先蹤がある。江戸時代の儒者・那波活所（二五九五―一六四八）に「杜鵑」と題する詩があつて、原念齋『先哲叢談』（巻之二）に取りあげられ、次のようにうたわれている（この詩の詳細は、源了圓前田勉 訳注『先哲叢談』<sup>(13)</sup>にゆずる）。

杜鵑春破後 杜鵑 春破るるの後

相喚不成群 相喚びて 群を成さず

子美詩中涙 子美 詩中の涙

堯夫橋上聞 堯夫 橋上に聞く

一声真識氣 一声 真に氣を識り

再拜亦憂君 再拜 亦た君を憂う

空駭曉窓夢 空しく駭く 曉窓の夢

月昏數片雲 月昏し 數片の雲

杜鵑（ほととぎす）を共通の自然物として、「子美 詩中の涙、堯夫 橋上に聞く」と、うたわれているわけである。なお、邵雍とはとどぎすの取り合わせは、日本人の好んだ詩材であつて、その後の漢詩にも、たとえば頼杏坪（二七五六―一八三四）の「邵康節聞鵑」と題する詩（『春草堂詩抄』<sup>(14)</sup> 卷六）や、すでに一部分引用した正岡子規の「子規」と題する詩の第二聯「万古 冤を訴う 蜀の天子、十年 乱をトす 宋の儒生」のごとく、しばしばうたわれている。「康節」は邵雍の諡、「宋の儒生」は邵雍をさす。逍遙は、「新春感」を書いて信州高橋月山子に寄す。長篇一首（102、203頁）の中で、

李杜登天詩流絶 李杜 天に登つて 詩流絶え

程朱去世学脈荒 程朱 世を去つて 学脈荒ぶ

と、うたっている。「李杜」は李白と杜甫、「程朱」は二程（程頤・程顥）と朱子。邵雍は、二程と直接交流があり、また宋学の大成者・朱子の学説に対して多大の影響をあたえた。『朱子語類』全百四十卷のうち、卷一百は「邵子之書」と題して、もっぱら邵雍が取りあげられ、論じられている。「中野逍遙 略年譜」（明治十二年（己卯）一八七九の条）によれば、逍遙は、故郷・宇和島の継志館で加藤

自慊（一八三七―一八九六）について朱子学を学んだ。逍遙は当然、邵雍を知る機会があった。また『先哲叢談』はおそらく、朱子学の薫陶を受けたものの必読書であって、くだんの那波活所の詩も、逍遙の知識にあったであろう。

逍遙が「偶成」（16、146頁）において月をうたったのは、活所の詩の最後の一句に「月昏し 数片の雲」がどこかで影響しているかもしれないが、それはさておき、杜甫と邵雍が対句の形でうたわれていることを知っていた逍遙はまた、当時の中国古典文学の入門的書物『古文真宝 前集』（巻之二）に収録されている邵雍の「清夜吟」と題する、日本人の間で膾炙した名作<sup>16</sup>

月到天心処 月 天心に到る処<sup>16</sup>

風来水面時 風 水面に来たる時

一般清意味 一般の清意の味

料得少人知 料り得たり 人の知ること少なるを

を、おそらく熟知し、暗誦していたであろう。「清夜吟」はきわめて有名な作品であると同時に、「生平の雅致 邵堯夫」は、「清夜吟」に展開されている世界を意識して表現されたと思われるからである。逍遙が月をうたった「偶成」詩に邵雍を取りあげたゆえんである。ついでに言えば、逍遙の「此間真味誰知得」一句は、邵雍の「一般清意味、料得少人知」にヒントを得てうまれた表現ではないかとさえ思われる句作りである。

杜甫の場合はどうか。「月色の人間に対する意味を、神秘的なもの、

あるいは少なくとも不可解なもの、として見るこゝろがあった<sup>16</sup>」といわれる杜甫には、月をうたった名詩・佳句が数多くあって、逍遙が具体的にいかなる作品を思い浮かべていたのか、右の詩からは容易に推断しがたい。が、まったく手がかりがないわけではない。「大月孤なり」の「孤」である。杜甫に「江漢」と題する詩があつて、次のようにうたわれている。

江漢思婦客 江漢 思婦の客

乾坤一腐儒 乾坤 一腐儒

片雲天共遠 片雲 天は共に遠く

永夜月同孤 永夜 月は同じく孤なり

落日心猶壯 落日 心猶お壮んに

秋風病欲蘇 秋風 病蘇<sup>よみが</sup>えらんと浴す

古来存老馬 古来 老馬を存するは

不必取長途 必ずしも長途に取らず

興膳宏氏は、「杜詩の月」と題する論文において、右の詩を引用した後、「江漢の一带をさすらう杜甫にとつて、月は孤独感を共にする仲間だった」（二三八頁下段）と、杜甫の「月への親近感」（二三八頁上段）を指摘された。逍遙の右の詩には杜詩のようにはっきりと月に同情をしめす表現はないけれども、杜甫の詩に親炙していた逍遙は、「永夜 月は同じく孤なり」に触発されて、「大月孤なり」が口をついて出たのではあるまいか。後引する「偶成」（41、163頁。本稿10頁上段）にみられるように、逍遙も月を孤独と感じ、月に

のれの姿を投影して、「親近感」を感じていた。要するに杜甫と邵雍は、月をうたつて心にしみる作品を残した詩人、という点で共通するのである。事のついでに言えば、ある文学事典の中野逍遙の項に「杜甫や邵康節の雄渾で沈痛な詩風を慕う」云々と記されている。杜甫についてはともかく、邵康節はいかがであろうか。

## 二の(2)、逍遙の「大月」

前章に言及した「偶成」(41、103頁)を取りあげる前に、「大月孤なり」の「大月」について、触れておかなければならない。「嘘よりは八町多い江戸の街」、大江戸八百八町を意味する「八百八街」が中国の詩に見られないのは当然のことであるが、「大月」は、杜甫や邵雍の詩、あるいは丙吉や曹操の作品にあらわれないのみならず、筆者の印象ではそもそも中国の詩にあまり見かけない言葉である。試みに『全唐詩』を検索してみたところ、わずかに晩唐の釈貫休の「秋望、王使君に寄す」(『全唐詩』巻八百三十二)に、ゆうまぐれ、東方の山の端にあらわれでた月と、西方にくれ残る夕焼け(目)をとらえて、

大月生峰角 大月 峰角に生じ

残霞在樹枝 残霞 樹枝に在り

と、雄大な自然をリアルに描写した作品一首のみであった。「大月」は、少なくとも唐の詩人たちが常用する語ではなかった。ところが

逍遙は、七絶「將に東都に向かわんとして留別す」(21、100頁。明治十九年作)の前半に

招朋此夕且憑樓 朋を招いて 此の夕 且に樓に憑らんとす

大月照來不說愁 大月 照らし來たつて 愁いを説かず

とうたい、あるいは三十二句からなる長篇詩「狂殘痴詩・その五」(86、102頁。明治二十五年作)の一聯に

北極明斗窓下碎 北極の明斗 窓下に碎け

中天大月池底浮 中天の大月 池底に浮かぶ

とうたっている。前詩についていえば、高樓を月光が照らしたす光景を愁いの情緒と結びつけるのは、おそらく「古詩十九首」以来の伝統。それを「愁いを説かず」と表現したところが逍遙詩の特異性である。また後詩についていえば、天上の月と池底に映った月は、おそらく唐詩以来の伝統的表現。拙稿「双鷺と隻鷺」(『大阪大谷園文 第三十七号』所収 平成十九年三月)を参照。「明月」ではなくて「大月」と表現したところが逍遙の独自性である。さらに「大月」は、「偶成」(41、103頁。明治二十四年作)と、九州紀行をうたった「九州感慨十二律・その七」(62、176頁。明治二十七年作)に、それぞれ次のようにうたわれている。

大月沈々射窓白 大月 沈々として 窓を射て白く

独有苦節傲乾坤 独り苦節の乾坤に傲る有り

秋風回首万波遠 秋風に回首すれば 万波遠く



魚躍海門大月生 魚は海門に躍りて 大月生ず

道遥は「大きな月」という表現をよほど好んだらしい。唐代以後の中国の古典詩において、また日本の漢詩において、どのような「大月」がうたわれているのか、まだ本格的に調べていないけれども、後述するとおり、道遥が景仰していたといわれる副島種臣（一八二八―一九〇五）の「十月望」〔蒼海詩選〕巻五の首聯に

堂堂大月挂城頭 堂堂たる大月 城頭に挂かる  
 一帶晴煙夜似油 一帶 晴煙 夜 油に似たり

とうたわれている。月を形容して「堂堂たる大」は、中国の思想的立場からいえば奇異な表現である。「月を以て日に比すれば、日の剛は男性にして、月の柔は女性なり。されば月に就きて支那に婦娥の伝説あり、西洋にても、之を以て女性とし、其代名詞は即ち一般に『彼女』ちよう語を用う<sup>(18)</sup>」であり、したがって月は本来、「堂堂」という形容語とは結びつきにくいからである。維新の元勲の月観を示す一好例である。ついでに子規の漢詩を調べてみたところ

「中秋 月を三津の魚獄に観る 武市子明と俱にす  
 の五」(明治二十二年作)

大月中天人影短 大月 中天 人影短く  
 細風度水笛声長 細風 水を度つて 笛声長し

「黄海の船中」(明治二十八年作)  
 天辺唯大月 天辺 唯だ大月

海面総洪濤 海面 総べて洪濤

と「大月」があらわれている。さらに当時の散文においても、月の名所である土佐の桂浜から取って雅号にした大町桂月<sup>(19)</sup>が、漢詩とはまた一味ちがった韻律の、心地よいリズムミカルな調子で次のように描写している。「郊原一路、満目すべて薄なり。夕陽沈まんとして雲色かなしみ、西風ひや、かにして、酸たる鳥声、秋の恨を語る。馬の嘶く声まず聞え、小歌聞えて近づくを見れば、若き農夫、馬背にあり。たづなは、鞍にあづけたるまゝにて、馬自ら歩むは、熟せる途にや。からす飛びつくして、四面寥廓たり。ふと顧みれば、招く尾花の末に、一団の大月明かなり<sup>(20)</sup>」。「大月」は道遥当時の文学作品に散見するのである。

ところで子規の「大月」の場合、「中秋 月を三津の魚獄に観る 武市子明と俱にす その五」の全文を掲げると、

請君莫復咎踈狂 請う 君 復た踈狂を咎むる莫かれ  
 我且吟詩臨曲塘 我れ且く詩を吟じ 曲塘に臨まん

大月中天人影短 大月 中天 人影短く  
 細風度水笛声長 細風 水を度つて 笛声長し

宴無美酒葡萄酒 宴に美酒の葡萄酒の縁無きも  
 座有嘉賓錦繡腸 座に嘉賓の錦繡の腸有り

半夜江樓叙別後 半夜 江樓 別れを叙して後  
 一双短褐露華光 一双の短褐 露華光る

のごとく、地上に「人影」を「短く」なげる「中天」(天の中央)にかかる「大月」というふうな、写生的描写に傾いている。それに

たいして、逍遙の「大月」の特徴は、「大月」への感情移入にある  
 といつてよい。次のような次第である。杜甫の「月」と題する三首  
 連作の「その一」の一聯に

翹翹移深樹 翹翹 深樹に移り

蝦蟇動半輪 蝦蟇 半輪を動かす

とうたわれている。やはり興膳宏氏が杜詩の「半輪」という言葉に  
 対して、「届かぬ思いの切実さを暗示するかのようだ」(二三五頁上  
 段)と指摘されたように、「大月」(まるい大きな月)に逍遙の思いの  
 切実さが託されていた、あるいは逍遙の感情が移入されていたので  
 はあるまいか。ここで「偶成」(41, 103頁)の全詩を引用すると、次  
 のとおりである。

半宵稿成百篇文 半宵 稿成る 百篇の文

自喜鬼氣迸筆端 自ら喜ぶ 鬼氣 筆端に迸るを

茅檐倒瀉天河水 茅檐 倒に瀉ぐ 天河の水

悲子壯心夏欲寒 悲子の壯心 夏 寒からんと欲す

十年磨出太阿劍 十年 磨き出だす 太阿の劍

欲鬻銳利向誰門 銳利を鬻ぎて 誰の門に向かわんと欲する

大月沈々射窓白 大月 沈々として 窓を射て白く

独有苦節傲乾坤 独り苦節の乾坤に傲る有り

醉余稜骨高聳天 醉余 稜骨 高く天に聳え

擬掠芙蓉十丈雲 掠めんと擬す 芙蓉十丈の雲を

第3句の「倒瀉天河水」は、天空を南北に流れる天の川、第9句

の「稜骨」(けずり取られた骨)は、作者のときすまされた文学的  
 才能の比喩、そして第10句の「芙蓉」は、仙居の芙蓉城。問題は、  
 「大月 沈々として 窓を射て白く」につづく「独り苦節の乾坤に  
 傲る有り」一句である。この句は、「十年磨き出だす太阿の劍、銳  
 利を鬻ぎて誰の門に向かわんとする」孤独な作者の心情の描写であ  
 ると同時に、「乾坤」(宇宙)の中を、孤独のうちに日夜、孜孜とし  
 て運行をやめない「大月」のすがたをも内包していて、今は孤独に  
 苦しんでいるけれども、いずれ「大月」となつて円成するであろう  
 大きな力を秘めている、というところである。このところをつきつ  
 めてゆけば、おのれのひそかな心のうちを知るものは、「偶成」  
 (16, 106頁)の「八百八街 大月孤なり」の「大月」につながるであ  
 ろう。「うまれ浪花の 八百八橋 月も知つて 俺らの意気地」<sup>(21)</sup>  
 といえは、通俗にすぎるであろうか。それならば「人こ、ろなけれ  
 ば月もまたこ、ろなし。人こ、ろあれば月もまたこ、ろあり。(中  
 略)あ、われひとり月を見るのみならんや。われ月を見るときに、  
 月もまた同じくわれを見るの樂みあり」<sup>(22)</sup>は、いかがであろうか。い  
 ずれにしても逍遙と「大月」との間には、無言の交流があった。逍  
 遙の「大月」が感情的色彩の濃厚なことは、子規の「大月」と比較  
 するとき、いつそうよく諒解できるであろう。

## 二の(3)、「此の間の真味」

最後の問題「此の間の真味」の真相。これを明らかにする糸口は、若い道遥の切望した円成の実体を究明することである。

前章に一聯を引用した「九州感慨十二律・その七」は、次のような作品である。

舟過天艸暮烟平	舟は天艸を過ぎ	暮烟平かなり
独泊長崎無限情	独り長崎に泊すれば	無限の情
台館掠眉英米仏	台館 眉を掠む	英・米・仏
雨雲決瞥露韓清	雨雲 瞥を決す	露・韓・清
経国文章倚誰奏	経国の文章	誰れに倚りてか奏せん
治安画策曷時成	治安の画策	曷れの時にか成らん
秋風回首万波遶	秋風に回首すれば	万波遶く
魚躍海門大月生	魚は海門に躍りて	大月生ず

長崎(出島)は、歴史的にいえば、諸外国(英国・米國・仏國・露國・韓國・中国)と、もつとも近く隣接する前線基地であった。こういう地方的情勢を前にして、「経国の文章 誰れに倚りて奏せん、治安の画策 曷れの時にか成らん」とうたわれ、また道遥の五首連作の「偶成・その一」(17、147頁)に

百年才筆治安策	百年の才筆	治安の策
千古雄胸審敵篇	千古の雄胸	審敵の篇

俗夫何識経綸業 俗夫 何ぞ識らん 経綸の業  
 枉道文章不值銭 枉げて道う 文章は銭に値せずと

とうたわれているように、道遥にも漢の賈誼(治安の策)や北宋の蘇洵(審敵の篇)のように、「経綸」「経国」の志があった。「もともと道遥は、彼の生きた時代の多くの青年がそうであったように、経世家として自らを位置付けていた」<sup>(23)</sup>。さらに道遥は、すでに引用した「新春感を書して、信州高橋月山子に寄す。長篇一首」の一聯に続いて、「英傑の出づる当に時有るべく、誰れか大任を荷うて扶桑に在る。蒼海老伯は千古の器、氣骨稜々として秋霜に傲る。詩は楚経に抵りて秦漢を貫き、文は莊荀の奇香を帯ぶ。篁村先生は一代の儒、博識比を求むるも海内に亡し。道は洛閩の正派を踐み、学は二酉の蔵する所を叩く。詩宗学伯 二人を除けば、紛々たる諸子 蚊虻の如し」云々とうたっている。「学伯」篁村先生は、道遥の帝大での恩師・島田重礼(一八三八〜九八)。注意すべきは、「詩宗」蒼海老伯・副島種臣である。道遥は種臣に対して、「老伯蒼海にはおそらく相まみえる機会を持たなかったと思われるけれども、漢魏の蒼雄雄勁な調べがある」とされたその詩風や高潔無私・豪邁闊達と評されるその人となりや道遥は景仰していたのであろう」と<sup>(24)</sup>、二宮俊博氏はいわれた。この二宮氏の指摘はそのとおりである。しかし、副島種臣はたんに「詩宗」であるのみならず、外務卿として外交に手腕を発揮した明治新政府の高官であったことも想起すべきではあるまいか。「偶成」(16、146頁)に杜甫と邵雍とともに、丙吉

と曹操がうたわれているのは、きわめて示唆的である。青年逍遙は、文武両道にたけた人物にაცოგაれ、もしかりに特定の人物を想定することが許されるならば、副島種臣のような人物になること、それが青年の一過的な夢想にすぎなかったとしても、これが円成の実体ではなかっただろうか。しかしなぜ副島種臣なのか。想像の域をでないが、種臣が仕えた佐賀藩主・鍋島閔叟(一八一四―七二)の姉は、逍遙が属していた宇和島藩の藩主・伊達宗城(二八一―八)の(二)の正室である。<sup>(25)</sup>つまり佐賀藩主と宇和島藩主は、姻戚の關係にあった。藩主間のこういう關係から、逍遙の周辺には種臣に関する好ましい情報がかなり伝わっていて、逍遙も幼少のときから種臣に対してある種の親近感をもっていた、というような事情もあつたのではあるまいか。いずれにしても、以上のように見ると、「此の間の真味 誰れか知り得ん」という一句の真相も、おのずから明らかになる。

ただ遺憾な事ながら、青春のエネルギーを恋愛に傾注した逍遙は、経世済民の志に向かつて奮い立つ前に、あまりにも早くに亡くなつてしまった。「新漢学者の中には(國府)犀東・(久保)天隨の如き詩人もいたから、彼(逍遙)も長命でこれ等の人々と共に活動していたら、(中略)詩壇にも新風をまき起こしていたことであろう」(カッコ内の語は、引用者の補足)。詩壇のみならず、政界にも<sup>(26)</sup>「新風をまき起こしていた」かもしれない。もつとも、もしも逍遙が長生きしていたならば、という仮定は、結局のところ空しい所業

である。それはともかく、大正七年十月、春陽堂から刊行された大庭柯公(明治五年(1872)不明)の『其日の話』「釣り」の一節に「宋の康節先生邵堯夫は、誰れでも知っておる漁樵問答の著者である」(四八頁)と記されている。下世話にも広く通じた大庭柯公は、諧謔好みであるとともに、本人の名前とは裏腹に高い教養の持ち主でもあるから、「誰れでも知っておる」と断言されても、文字どおり「誰れでも」というわけにはゆかないであろうが、逍遙の教養のなかに、邵雍はまだ命脈をつないでいたことだけは、疑問の余地がない。本稿で言いたいのは、要するにこのことである。

### 三、余 論

最後に補足を三点。

その一。杜甫と邵雍の組み合わせの淵源は、南宋の劉克莊(一一八七―一二六九)の「村墅」(『後村先生大全集』巻九)

子美問閔離亂際 子美 問閔たり 離亂の際

堯夫生死太平時 堯夫 生死す 太平の時

および「書事十首・その二」(卷三十一)

吾評子美飢寒態 吾れは評す 子美 飢寒の態

不似堯夫快活身 堯夫 快活の身に似かずと

などの詩句にまでさかのぼる。逍遙より四歳後輩の高山樗牛(一八七二―一九〇二)は、「月夜の美感に就いて」<sup>(28)</sup>と題する文章のなか

で、「月夜的美感を成せる最も大なる要素凡そ三つある」(53頁)として、「一は月の光なり、二は是の光に照らされたる夜の世界なり、三はこの月夜の光景が観者の心に惹き起す所の聯想なり」(54頁)をあげた。日夏耿之介が「浣花草堂詩と先儒邵子とを並べ挙げたところに彼の趣味が見ゆる」と指摘したのは、さすがに博学多聞、彼の眼のつけどころは鋭い。しかし、浣花草堂詩と先儒邵子の並萃は、逍遙の独創ではなかった。月をうたつて意表にでて、杜子美と邵堯夫を「聯想」したところに、「逍遙の趣味が見ゆる」。そして、逍遙が月をながめながら、杜子美と邵堯夫を「聯想」したのは、楞牛の表現を拝借すれば、兩人の詩に「一種の幽渺なる安慰を与」(72頁)えられたからである。もつとも、楞牛は、「支那文学の思想は我國民文学の進歩に裨益するものに非ず」云々と、「支那文学の思想」に消極的なのだが。

その二。「偶成・その一」(17、17頁。本稿11頁上・下段)の「文章は錢に値せず」は、唐の羅隱「送竈」詩(『五代詩話』引)の句「玉皇 若し人間の事を問わば、為に遣え 文章は錢に値せず」とあるが、梁川星巖(一七八九—一八五八)の「得意 才を薦むるは偶然に非ず、文章 直せず 半文錢」(『旅懷を書して仲建弟に寄す』『星巖甲集』卷二)、あるいは「文章 値せず 半文錢、才 曹劉に到るも也た等閑」(『乙巳の季夏、將に西帰せんとして四絶句を題す』『星巖戊集』卷四)云々が意識されていたか。ただ、逍遙は「九州漫筆」の「序」において、「ああこの遊をしてなお旬日を緩うするを得しめ、

加うるに頼襄・星巖の筆を以てせしめんか、則ち九州の山水、重ねて光を明治の昭代に添えんこと必せり」(58頁)と記しているから、頼山陽(一七八〇—一八三二)とともに梁川星巖の文章能力を高く評価していた。逍遙が九州旅行を企てたのは、頼・梁兩人の九州旅行の影響があるのだろうか。また「九州漫筆」の耶馬溪と妙義山の優劣論は、山陽「耶馬溪図巻記」(『山陽遺稿』卷之七)の耶馬妙義の優劣論に刺激されてのことであろうか。

その三。「逍遙遺稿」正編の最後に収められている「豆州漫筆」(74・181頁以下)は、逍遙が亡くなる明治廿七年甲午(二八九四)の一月、「狂才時に違ひ、奇骨世に乖く」失意の悲境にあつて、「心を病み、而して鼓動時に激す」、「熱を憂ひ、而して神氣益、銷す」病的状態から解放されようとして、「湘南卅里の遊を作す」べく、伊豆旅行をしたときに作られた作品である。「豆州漫筆」は、安積良斎(一七九〇—一八六〇)の紀行文「遊豆紀勝」を意識して書かれたふしがある。が、筆者の興味は次に述べるところにある。この作品の最後の結びは、次のような悲痛な内容の文章でしめくくられている(80、188頁)。

吁歎尊已遠、孔聖亦邈。人之不得情之正也久矣。吾迷而病、病而狂。言不知所出、筆不知所發。已生于怨、又長于怨、而將死于怨。旻天無語、奈吾心之撩乱何。(ああ歎尊已に遠く、孔聖も亦た邈たり。人の情の正しきを得ざるや久し。吾れ迷いて病み、病みて狂う。言の出づる所を知らず、筆の發する所を知らず。已に怨に生

まれ、又た怨に長じ、而して將に怨に死せんとす。昊天語無し、吾が心の撥乱を奈何にせん。」

「釈尊已に遠く、孔聖も亦た遠たり」という仏・儒の並述は、仏・儒共存という日本特有の思想的特徴の反映であると同時に、「遠く」「遠たり」という逍遙の詠嘆は、「情の正しき」を堅持するうえで理論的支柱となるべき釈尊や孔聖の権威が、すでに失墜していることの反映でもある。「儒教地を払い、宗教冷視さる、社会」とは、大町桂月が明治三十二年に草した文章「文学と国家」<sup>(32)</sup>の一節である。しかし、筆者に誘惑的なのは、逍遙の「已生于怨、又長于怨、而將死于怨」という表現である。この「怨」は、藤村の「哀歌」の序文「中野逍遙をいたむ」中に触れられている「逍遙が秋怨十絶」の「怨」であるが、邵雍の詩集『伊川擊壤集』は、逍遙の愛読書ではなかったか、少なくとも邵雍の辞世の詩である「病亟吟」(巻十九)を、逍遙は知っていたのではないか。「病亟吟」は、次のとおりである。

生于太平世 太平の世に生まれ  
長于太平世 太平の世に長じ  
老于太平世 太平の世に老い  
死于太平世 太平の世に死す  
客問年幾何 客は問う 年は幾何ぞと  
六十有七歳 六十有七歳  
俯仰天地間 天地の間に俯仰して

浩然無所愧 浩然として愧づる所無し

逍遙の「豆州漫筆」における「生・長・死于怨」は、「病亟吟」の「生・長・老・死于太平」からヒントを得て生まれた表現であるはあるまいか。逍遙に「老」が欠けているのは、彼がまだ「老」と称すべき年齢に達していなかったからである。解明は、今後の研究にまちたい。

## 結 語

本稿が中野逍遙の研究にどれほど裨益するところがあるのか、専門家の推察にゆだねなければならぬ。しかし、中国の十一世紀の神秘的な先天易学とよばれる宇宙論をうち立てた風流な哲学者の名が、日本の十九世紀の狂熱的恋をうたった一途な漢詩人の遺稿の中に存在することだけは、一見、奇妙に思われるけれども、紛れもない事実である。本稿に引用したとおり、また本稿には論旨の関係で引用することができなかったけれども、明治以後今日まで、逍遙があつたすぐれた論稿は、少なくない。しかし、筆者の知るかぎり、中野逍遙と邵雍との関係を組上に載せたものは皆無である。もし本稿に意味があるとすれば、両者の関係を取りあげた、という一点にある。そして本稿によって、少なくとも邵雍研究がいつそう豊かなものになることだけは、邵雍の文学をいささかかじったものとして、確信をもっていえる。

注

- (1) 二宮俊博「鶴鳴いて月の都を思ふかな 子規と逍遙」(『榎山女学  
園大学研究論集 第二十七号 人文科学篇』一九九六)を参照。
- (2) 「子規の漢詩―叙景と述志をめぐって―」(『国文学 解釈と観賞  
第55巻2号』1999年所収 100頁上段)。逍遙の書簡は、『子規全集  
別巻二』(講談社 昭和五十二年三月)に収録されている。
- (3) 『日本人 十二号』三十一頁下段(明治二十八年)。
- (4) 『帝国文学 第十二』一二四頁上。
- (5) 『国文学 言語と文芸 九月号』3頁上・下段(明治書院)。
- (6) 子規の漢詩は、『子規全集 第八巻』(講談社 昭和五十一年七月)  
による。
- (7) 「子規と漢詩の諸相―神韻的のまじめなるもの」(『国文学 解釈と  
教材の研究 第49巻4号』2004年3月号所収 99頁下段)。
- (8) 藤村第一詩集『若菜集』明治三十年(一八九七)刊に収録。
- (9) 『明治大正詩史 上巻』一八五頁(新潮社 昭和四年一月)。
- (10) 『方向 第一一〇号』(一九九〇年三月五日)。
- (11) 『方向』第二二六号から二二二一―二二二二号に連載。
- (12) 『逍遙遺稿』付「雑録」(234頁)。
- (13) 『東洋文庫574』(平凡社 1994年2月)。
- (14) 富士川英郎・松下 忠・佐野正巳編『詩集 日本漢詩 第十巻』  
所収(汲古書院刊 昭和六十一年十月)。なお、本稿に引用する日  
本人の漢詩は、注記のないかぎり、このシリーズによる。
- (15) 一例を挙げれば、仁枝忠「俳文学と漢文学」(笠間書院 昭和53年  
9月)によれば、蕪村の句「月天心負しき町を通りけり」(187頁)、  
子規の「大空のまっただ中やきょうの月」(305頁)は、それぞれ邵  
詩の前半二句から脱化したという。
- (16) 吉川幸次郎「杜甫と月」(『中国文学報 第十七冊』所収 44頁上  
段 一九六二年十月)。
- (17) 『立命館文学 第58号』所収(2007年2月)。
- (18) 高山樗陰(一八七三―一九〇二)『無絃琴』『樗陰雜語』(『明治文  
学全集 83 明治社会主義文学集(一)』所収 筑摩書房 昭和四  
十年七月)。
- (19) 大町桂月「三十八年ぶりの故郷 十二 桂浜の月」大正七年作  
(『日本図書センター』全集 第三巻「七二七頁」)
- (20) 『花譜』明治四十二年作(『全集 第壹巻』二二三・二四頁)。
- (21) 西條八十「王将」昭和三十六年作(『西條八十全集 第十巻』所収  
国書刊行会 一九九六年一月)。
- (22) 島崎藤村「月」明治二十七年作(新潮社『全集 第一巻』167頁)。
- (23) 箕輪武雄「中野逍遙論」(『日本近代文学 第25集』所収 115頁下  
段 昭和53年10月)。
- (24) 二宮俊博「高橋白山・月山父子のこと」(『榎山女学園大学研究論  
集 第三十号 人文科学篇』一九九六)所収 81頁下段。
- (25) 大橋昭夫「副島種臣」46・47頁(『新人物往来社 一九九〇年七月』  
を参照)。
- (26) 三浦叶「明治の漢学」二二三頁(汲古書院 一九九八年五月)。
- (27) 拙稿「朱敦儒の詞にあらわれた邵雍」44頁上段(『中国文学報 第  
八十冊』平成二十三年四月)を参照。
- (28) 『樗牛全集 第一巻』美学及美術史』所収(博文館 明治三十七年八月)。
- (29) 『明治浪漫文学史』(中央公論社 昭和二十六年八月)第七章 散  
文形式の浪漫主義 第二十三節 漢詩文の浪漫者(三三二頁)。
- (30) 「支那文学の価値」(『樗牛全集 第二巻』文芸及史伝 上』所収 499頁 博文  
館 明治三十八年三月)。
- (31) 富士川英郎・佐野正巳編『紀行 日本漢詩 第三巻』所収(汲古  
書院刊 平成四年八月)。
- (32) 『桂月全集 第八巻』一四五頁。

